駄目な僕

ラ・サール高等学校　二年
進藤秀一朗

栗の花の匂いを僕は嗅いだことがない。

ただ、ティッシュに包んだこの液体はそれと同じ匂いがするらしい。枕元に置いた時計を手に取る。深夜一時を過ぎていた。ドアノブに手をかけて部屋を出る。薄暗いはずの照明がやけに明るかった。右手に栗の花をぶら下げて、トイレに向かう。足音が廊下に響き渡った。この音は寝静まった地球人全員に聞こえているのかもしれない、と思ったが、日本の裏側に住む人は今頃真っ赤な太陽を浴びているのだと考えると馬鹿らしくなった。栗の花をトイレに流してそれから手を念入りに洗う。鏡には、悪行を終えた罪人のような顔があった。どこからどう見ても十五年間僕が見てきた顔だった。それなのに今夜ばかりは自分が自分でないような気がしてならなかった。そっと鏡から離れ自室に戻り、そして布団に横になる。

夜の片隅で男を想い射精した。これまで幾度も自制してきたのに衝動が僕の指先を突き動かし、一気に達してしまった。その疲れからか、眠気は急に襲ってくる。ヘッドフォンをつけてロバータ・フラックの「バラッド・オブ・ザ・サッド・ヤング・マン」を聞きながら眼を閉じた。

＊

僕は地元を離れ寮生活をしている。通っている学校の名前は天弓中学校。天弓が何を意味しているのか未だに知らないが、「てんきゅう」という呼び名は気に入っている。

自分で言うのもおかしな話だが、小学生までは気の利く優等生として周りと馴染めていた。成績も悪くはなかったし、体育の時間に足を引っ張ってしまうほどの運動音痴でもなかった。教師からも気に入られて――いや正確に言えば、教師からの気に入られ方を理解していた、と言ったほうが正確かもしれない――皺の寄った恵比須顔を何度も見てきたものだ。こんな話をしたら、「なんだ、ただの人生に成功してる奴じゃねえか」って思うかもしれないが、僕だってある大きな不幸を抱えている。詳しくは語らないが、大雑把に言うと僕は生まれつき心臓の一部が壊れている。余命はまだはっきりしないが、「あまり長くはないんだから、笑える時に思い切り笑いなさい」と毎晩泣きながら母に言われていた。そんな母が病で倒れ、父と僕二人になったのだが、父は当然のことながら働かねばならず、中高大と寮生活をしたほうが都合がいいということになり、偏差値もさほど高くはない天弓中学校を受験した。

こうして片田舎の男子中学校に飛ばされたというわけだが、最初は別に寂しくなんかなかった。友達もすぐに作れたし、女子がいないのも最初は別に何とも思わなかった。でも、あれは中学一年の十月だったと思う。個室である僕の部屋に同じ階の先輩が入ってきた。彼は成人向け雑誌を片手に僕の眼前でズボンとパンツを下ろし、性器を擦り始めた。呆然と立ち尽くしていたのだが、先輩が「ティッシュ、ティッシュ」と掠れ声で言うから、我に返ってティッシュを先輩に渡した。それから僕は０・０６ｍｍと習った精子が混入された精液というものを生まれて初めて見たのだ。一種の感動を覚えながらも、その後どんなことがあったかはあまり覚えていない。覚えているのは「このティッシュはトイレに流さなきゃ駄目だぞ」というその一言だった。

この先輩を僕はマスター先輩と呼ぶことにした。マスターはマスターベーションからきていることは言うまでもない。

後日、先輩のあの時の動きを思い出しながら自分でもやってみたら確かに精液が出たから驚いた。そのことを周りの友達に話すと、「なに、お前今まで知らなかったのかよ」と馬鹿にされた。

こうして性に目覚めていった僕は次第に女の身体を求め始めるが、無論僕の学校は男子校であり、ストレスとそれに伴う吹き出物が増えていくばかりだった。

そうこうしているうちに二年が過ぎ、いま僕は中学校の最上級学年――中学三年生――である。ただし、世間一般の中三に付随されるであろう受験生という肩書きは持っていない。この一年を経ると隣校舎の天弓高等学校に入学することになっている。

何事も無く単調な日々が続くのだろうと思っていた矢先、二つの事件が起こった。

一つ目は自分の持病が悪化したこと。中学三年の始業式を目前に控えた春休みに僕はソファーの上で横になったまま意識を失ったらしい。その夜、精密検査を受けて医師に「はっきりと言いますが、あまり長くはないかもしれません」と言われた。母のあの言葉が痛いほど身に染みた。しかし、それは僕にとってはあまり大したことではない。それ以降、心臓発作を起こすことはなく、ただ強いて残念なことを言うなら定期検診の間隔が三週間に一回ペースになったことぐらいだろうか。

問題は二つ目だ。結論から言うと、僕は入学間もない中学一年生の後輩を好きになってしまった。それも友達として好き、とかそういう単純な意味ではなく、異性に抱くそれと同じものを彼に抱いた。もちろん病気とは定義されないだろうが、僕にとってはこのことは病気以外の何物でもなかった。自分を疑った。疑いに疑い、自分の心と長い時間かけて二者面談を続けたが、結論は変わらなかった。だが「僕は後輩の男の子が好きだ」なんておくびにも出さなかった。この感情を晒すということは「僕は世間からはぐれました」と言ってるのも同然なのだ。少なくとも今の世の中では。

＊

胸の中の想いを膨張させながら、四月が過ぎて五月になった。慌ただしく文化祭を終えて、その余韻がまだ残る五月の第四週目に校門でマスター先輩と遭遇した。

「お前も中学三年生か」

「おかげさまで」

僕は校門に寄りかかりながら答えた。

「俺が中三の頃はな、寮教諭と毎晩やってたんだぜ」

「え、本当ですか？」

「嘘に決まってんだろ。あんな奴とどうやってやるんだよ」

案に違わず先輩は言った。

「俺は誰とでもできる質じゃねえんだよ」

マスター先輩はゲイだ。先輩には過去に後輩を襲っただの、いつも寮の大浴場で勃起しているだの、まことしやかな噂が色々ある。

「お前、栗の木を見たことがないって言ってたよな？」

「はい。先輩よく覚えていますね」

「印象的だったんだよ。お前が中二の頃だったっけ、『先輩、精液の臭いって本当に栗の花の匂いなんですか？』って俺にしつこく聞いてきただろ？」

先輩は呆れ返ったように言った。

「そんなしつこかったですか？」

僕がそう聞くと、先輩は頷いた。

「それで本題なんだが、栗の木見に行かないか？」

先輩はにやにやと言った。

「この前、ちょうど見つけたんだよ」

僕は二つ返事で応じた。

＊

週末にマスター先輩と出かけることになった。天弓寮は中学寮と高校寮に分けられており、その距離は五百メートルほどなのだが、そのちょうど真ん中あたりに位置する石碑の前で待ち合わせした。僕は十分前にはその石碑に行き、付近にあるバス停のベンチに腰を下ろしたが、先輩が来る気配はなかったので仕方なく鞄からドストエフスキーの「罪と罰」を取り出した。六ページほど読んだところで先輩がきた。

「ごめん、ちょっと遅れたわ」

「僕も今きたところなので」

「そんな出来立てほやほやのカップルが使うようなセリフ言わんでいいって」

「先輩との初デートですから」

「じゃあ手つないで歩くか？」

僕らは徒歩十五分の駅舎に向かった。先輩は歩きながら何度も僕の手を握ろうとしたが、そのたびに僕は振り払った。駅舎に到着し切符を買って路面電車を待つ間、先輩の好きな

人の話について聞かされた。高校二年生に進級してからクラスが別々となり、たまに廊下ですれ違う程度でしか姿を見ないらしい。先輩の好きな人は――知っている者はほんの数人しかいないそうだ――典型的なクラスの人気者で、その爽やかなルックスに僕も非常に高い好感を抱いている。先輩は、その人のことが中学二年生の時から好きらしいから、三年間片想いしていることになる。比較するものでもないかもしれないが、僕の恋なんてちっぽけなものかもしれない。

「それで、お前は好きな人いるんか？」

先輩は唐突に聞いてきた。乗車駅から一駅を過ぎたあたりで。

「いませんよ。先輩何か勘違いしてません？」

先輩の方に体を向けて言う。

「僕はゲイじゃないです」

「正直なところどうなんや」

「いや、だから本当に違いますって」

「嘘つかんでええって。あけすけに言ってくれや」

こんな押し問答が五分ばかり続いた。自分には好きな男の子がいることを誰にも言っていないはずなのに、先輩は確証を得ているかのように何度も聞いてきた。僕はもうこの際言ってしまおうか、と思ったりもしたが、なかなかその度胸も生まれなかった。そうこうしているうちに、先輩は「この鄙びた駅だ」と言ったので、下車した。僕はこの駅には一度も訪れたことがなかった。駅をあとにして、何とは無しに見上げた空は灰色だった。小雨がそぼ降る中、近くのコンビニエンスストアに向かいビニール傘を買った。先輩は「相合傘でもいいぞ」と言ったが、やんわりと断った。

小腹が空いた僕らは、栗の木に対面する前にレコード喫茶に入った。壁にはザ・ビートルズのポスターがびっしりと貼られていた。でも、店内に流れているのは彼らの歌ではない気がする。「絶品です」とメニュー表に書かれたサンドウィッチとお冷をそれぞれ二つずつ頼み、音楽に耳を澄ました。

「いい音楽ですね」

「そうだな」

「でも、これビートルズじゃないですよね？」

「何だと思う？」

「え？　先輩は知ってるんですか？」

「俺を誰だと思っている」

「教えてください」

「ザ・ビーチボーイズだよ。今のは『駄目な僕』っていうタイトルだったはず」

マスター先輩がそう自信ありげに言うと、グラスを吹いていた店のマスターが「若いのに詳しいんだな」と言って、そのレコードジャケットを持ってきてくれた。店のマスターは「俺のお気に入りなんだ」と言い、マスター先輩も「僕も好きなんですよ」と言ってそれからマニアックすぎるマスター同士の会話が始まった。僕は横から聞いていたが、途中からついていけなくなった。マスター先輩は音楽にやたら詳しく、

教えてもらった曲もたくさんある。その大半を僕も気に入っている。
店のマスターがサンドウィッチ二つと「サービスだ」と言ってオレンジジュースを二杯持ってきた。それを頬張りながら先輩はレコードの魅力をたっぷりと僕に語った。まだＣＤとレコードの音の違いはよくわからないが、僕はなんとなくレコードに恋し始めている気がした。二人ともサンドウィッチをあっという間に完食した。本当にそれは絶品だったから。
喫茶店を出てから、先輩は「駄目な僕」の入ったザ・ビーチボーイズのアルバム「ペット・サウンズ」は寮にあるから、今夜にでも借りに来い、と言った。僕はマスター先輩の優しすぎる人柄を再確認した。
取り壊されてばかりの一戸建てや現在建設中となっている保育園などの向かいに位置する公園に入った。
「ここに栗の木があったんや」
僕は栗の花が何色をしているのか知らなかったので、どれが栗の木なのかはわからなかったが、先輩が指差す方からして、おそらくあの白く長い花を吊り下げているものが栗の木なのだろう。先輩に「あの白いやつですか？」と尋ねると、先輩は「そうだ」と即答した。
「先輩、これが本当に精液の臭いですか」
栗の木を前にして僕は聞いた。
「雨で臭いが出ないのかな」
「いやいや、そんな距離からじゃ臭いはわからんよ」
先輩は心得顔で言った。
「もっと近づかんと」
僕は垂れ下がった白い花に身を寄せたかったが、そこには大きな毛虫がうずくまるようにびっしりとついており、また虻がその周りを集っていたので近づくのが躊躇われた。
「大丈夫って。なにもせえへんって」
怯える僕を見て先輩は言った。
「いや僕、昔から虫は大の苦手なんで」
「そうやって怯えたままじっとしていても、何もできんぞ」
「わかりました」
近づいてから気づいたことは、毛虫が一種類ではなく複数の種類――五種類くらいはいる気がする――がいたこと。そして本当に栗の花は精液の臭いだったことだ。僕は感動のあまり、日ごろから嗅ぎ慣れているはずのその臭いを、まるで大草原の中で大きく深呼吸をするかのようにして堪能した。
「先輩、本当に栗の花って精液の臭いがするんですね」
「そうだよ。きた甲斐があっただろ」
「はい、ありました」
「お礼に、お前の好きな奴を白状しろ」
先輩は優しく微笑みながら言った。
「なんで先輩は、僕が同性愛に目覚めた、ってわかったんですか？」
本当に疑問だった。途中言いながら、これは「自分はゲイです」と言ったも同然だと気づいたが、なんかもうどうでも

よかった。
「お前、文化祭の時、中学一年生のブースにほとんどずっといたじゃん」
先輩は笑っていた。
「傍から見たらお前ただの不審者だったぜ」
「そこで気づいたんですか？」
「ああ。とりあえず好きになった人を是が非でも見ようとするのが恋の第一原則だからな」
ワイドショーに出てくる胡散臭い専門家のような口調で先輩は言った。
「それで、お前の好きな奴の名前は？」
僕は完全に両手が手錠で塞がれた気がして、その名前を出した。先輩は「俺もそいつのこと知ってるわ。狙ってたんだけどな」と落胆した。本当なのかどうかはわからないが、先輩は物凄く落ち込んでいた。
鄙びた駅に戻る間、先輩はその子のどこが好きなのかを尋ねてきた。どこなんだろう。「全体的にですかね」と当たり障りのない答えを提示すると「そんなもんだよな」と先輩は肯定してくれた。それから小雨がそぼ降る街をあとにして、路面電車に揺られ、天弓寮の最寄駅に戻った。真っ赤な太陽を背にして寮に向かう。
「将来的にはその後輩とキスして抱きしめてベッドの中に入りたいんだろ？」
「まあ、そうですね」
「青春だなあ」
「どこが青春なんですか。想いを打ち明けることもできないし、ほんとこの世の中でゲイになったって何一ついいことありませんよ」
僕は反論した。
「っていうか、先輩ただ『青春だなあ』って言ってみたかっただけじゃないですか？」
「そうだな」
先輩は、はにかんで言った。
「ただ、もう少し時期は待った方がいいかもな」
「何でですか？」
「まだ精通してないかもしれないだろ」
僕はマスター先輩に秘密を打ち明けるのは悪い選択肢ではなかったな、と思った。この残酷な世の中で、僕と共通点をもつマスター先輩はありがたい存在だったし、マスター先輩も同じことを思っているだろう。仲間が一人でもいるだけで、気持ちは幾分か楽になった。ふと夕焼け空を見上げる。雲がゆっくりと流れている。その流れに沿って飛行している烏が独りで鬱々と鳴いていた。
「おい、そこの烏よ。お前はどこに行くんだ？」
返事はなかった。

＊

六月が梅雨前線とともに瞬く間に消えて迎えた一学期の終業式。相変わらず野暮ったい校長の話が続いていた。夏休みは寮が閉鎖されるので、地元に戻らねばならない。周りの者は久しぶりの家族との再会に想いを馳せる中、僕は横目で後輩を探していた。彼は顔を下に向けて何やら憂鬱そうだった。その憂いじみた様子が何とも愛おしかった。終業式が終わり、皆が三々五々散っていく。友達の少ない僕は一人でとぼとぼ歩き、教室に戻ろうとしていたのだが、不意に肩を押された。後ろを振り返るとマスター先輩がいた。

「お前はどうやって帰るんだ」

「新幹線です。一緒に帰る人いないんですか？」

僕は冗談のつもりで言ったのに、先輩は図星だと言わんばかりの顔をした。申し訳ない思いがしたが、それは杞憂だった。

「もちろん一緒に帰る人なんて山ほどいるさ」

先輩は得々と言った。

「一緒に帰る人がいないのは、お前の方じゃないのか？」

「もちろん、僕だって一緒に帰る友達くらいいますよ」

そう言ってはみたものの、それは嘘だった。でもなんとなく見栄を張ってしまった。

そのあと、先輩は中学校舎とは逆方向の高校校舎に向かって颯爽と駆け出した。

＊

ホームルームが終わり、皆が一目散に天弓寮という名の強制収容所からいそいそと脱出していたが、僕はしばらく寮に残った。帰省準備は整っていたものの、一人で帰っているところを誰にも見られたくなかったからだ。なんとなく気の赴くままに始めた無意味な自慰行為を終えて、昼寝をした。そして日没が近づいてきた頃、晴れ間を縫うようにしてひとり寮を出た。

スーツケースを引きながらただひたすらに歩いた。一人ぼっちの典型と形容されて仕様がない自分の惨めな有様に思わず吹き出してしまった。駅舎で切符を購入するまで僕は後輩のことをずっと考えていた。彼は今頃、もう家についているのだろうか。そうしてあの笑顔で両親に中学校の出来事を語っているのだろうか。同様にそんなことをついつい考えては取り留めもない気持ちになる自分の将来についても考えた。本当にこのまま歩き続けていいのだろうか？

駅舎に到着し切符を購入する。人と人との間をすり抜けながらエレベーターに入る。ドアが閉じかけている中、ある老人が駆け込みで乗ってきた。

「ごめんなさい」

ちりめん皺を寄せて老人が言った。

「天弓中学校の学生さん？」

「そうです」

あっけらかんと答えると老人は「そうかい」と言ったきり、

話しかけてこなかった。気まずくなったが、どうでもよかった。

ホームに上がりそれから列車を待っている間、ふとこのホームに飛び降りてやろうかなと思った。飛び降りて、そしてあの列車と衝突すれば今までの記憶はもちろん、自分の存在すらもすべてこの世から消し去ってくれるような気がした。ちょうどいいタイミングで、まもなく列車が到着するというアナウンスがあり、僕のこの思いつきを実行すべきかどうか逡巡していた時、後ろから声をかけられた。

「お前、何やってんだよ」

マスター先輩がいた。僕は予期せぬ展開に思わず小さくない声を上げてしまった。

「先輩はもうとっくに帰っているかと思っていましたよ」

驚嘆の表情そのままに言った。

「友達と一緒に」

「あはは。いや友達、急用で先に帰っちゃってな。だからこの通り一人なんだよ」

先輩は満面の笑みで言った。

「それはドンマイですね」

僕は同情を込めて言ったが、内心では、もとから一人で帰る予定だったのではないか？　と思った。ただその疑いよりも先に歓びの方が押し寄せてきた。

「先輩、自由席ですよね？」

＊

目当ての新幹線に乗り込み、適当な席に腰を下ろした。

「お前、さっきしこったばっかだろ」

先輩は座席を後ろに傾けながら言った。僕にだけ聞こえるような声量ではなく、通路を挟んだ向こう側の三人席に座っていた女子中学生三人組が僕に意味有りげな目つきをよこしてきた。彼女たちは皆、黄金色に日焼けしており、とりわけ一番奥に座っていた女の子は瞳が大きく、鼻がすっと通っていた。そして筋肉のついた太ももを無遠慮に露出させていた。去年の自分だったら、その太ももを熱のある眼つきで観賞し、あわよくば一人になってから彼女に性欲の矛先を向けていたかもしれないが、世間からはぐれかけている僕なので、それ以降、その太ももに目を向けはしなかった。

大会遠征の途中だと思しきその三人組の目線を気にしつつ、

「なんでわかったんです？」

と彼女たちに聞こえるように言ってやった。

「目だよ。俺は目を見たら大体そいつが今日やったか、やってないかがわかるんだ」

先輩はしたり顔で言った。

「それよりお前、席移動しないか？」

「僕も同じこと考えてました」

席から離れる時に、やはり三人組から視線を感じたが、僕は能面のような表情をして、目を合わせはしなかった。車両

を変えて再び席に座る。今度は周りにあまり人がいないところを選んだ。二つ後ろにイヤホンをつけながらパソコンと睨みあっている三十代半ばと思われるスーツの男。その後ろには老人――さっきエレベーターで話しかけてきた老人だろうか――が座っていた。

人目を極力避けた環境の中で僕らはお互いの好きな人について語り合った。先輩の好きな人は、まだ変わっていなかった。どうやら日に日に愛が増していくらしい。しかし相手は自分のことを普通の友達だと思っているから、なかなか告白できないんだ――そんな話だった。

「ところで、お前の方はどうなんだ」

先輩は矢庭に尋ねた。

「もうその子でしこったんだろ？」

「はい、とっくの昔に」

「気持ちよかったか？」

「事後、後悔したんです。いよいよ道に外れたなって」

「俺もわかるよ。最初は、誰だってそうなるよな」

首を縦に振りながら先輩は僕を見た。

「でも、ただ人を愛した結果だからな」

「どういうことですか？」

僕も先輩と目を合わせた。

「別に男が女を愛したって男を愛したって、そこに愛が生まれていることに変わりはないだろ？　愛があればなんでもいい、って言い方乱暴かもしれないが、俺はそれを信念にしてるんだ。愛がそこにある。ただそれだけのことだよ」

先輩は言い終えてから僕と目を離し、しばらく目の前の避難経路図を見ていた。

「でも、俺たちどこに避難すればいいんだろうな」

新幹線が出発し、二駅ほどを通過したあたりで、先輩はぽつっとそう言った。いつもの朗らかな声とは違って物寂し気な声だった。

「やっぱ雲の上ですかね」

僕の声は少し上擦った。

「意外と本気で言ってます」

車窓には黄緑色の畑があたり一面に広がり、ところどころに赤やら青やら黒やら様々な色の屋根を抱える民家があった。新幹線はそれなりの速度を出しているのだろうけれど、それでも景色は変わらなかった。このままずっと変わらないのもそれはそれで悪くないと思った。

僕の降りる駅のひとつ前で先輩は降りた。

「でも、お前決して死ぬんじゃねえぞ」

そう言い残して先輩は僕に手を振った。

一人になってから、しばらくの間、泣いた。

＊

新幹線の改札口を抜けて、中途半端に都会な僕の地元と再会した。やはり、ここに住む人たちは心の奥底が冷えている。

通りゆく人たちを傍観して、そう思った。ここからバスに一時間ほど揺られてからマンションにつく。バスターミナルに向かう途中で、大きなリュックを背負った外国人観光客に話しかけられた。

「Where's the bus terminal?(バスターミナルはどこかな?)」

男は気遣ってくれたのか一語一語はっきりと発音した。

「I'm going there, too. Please follow me. (僕もそこに行きます。付いて来てください)」

僕は覚束ない発音で言った。

それからしばらくして向こうのトイレから同じ背格好の男—ただし、今度は大きなリュックではなく深緑色の鞄を肩に掛けている—が現れた。リュックの男は「Come on. He'll help us. (こっちだ。この坊やが道案内してくれるって)」と言って鞄の男を手招きした。それから数秒後、彼らは手をつないだ。

リュックの男が「Go there. (行こうよ)」と目配せした。僕はまず周囲の目線を気にした。案の定、通りゆく人たちの中には僕らを嘲笑するかのように眉を暗くする人がいた。ある人は、「お気の毒に」と言わんばかりの目で僕を見るし、ある人は、僕ら三人を前に不自然に避けた。出し抜けに僕はこの場から離れたかった。「Sorry, I'm a stranger here. (このあたりのことはよく知らないので案内できません)」と言って逃げておけばよかったな、と思った。だが、このまま逃げていていいのか? 振り向いた先にある景色を僕は待ち望んでいるのでは?

「Don't worry. There's nothing unusual about their eyes. (心配しないで。いつものことだから)」

リュックの男が話しかけてきた。

「To be honest, I yearn for you because you are a nice couple! (正直、あなたたちに憧れます。だってお似合いのカップルだから)」

彼らの内に秘めている孤独を感じ取った私は本心を口に出した。

「In my country, I often see gay couples walking hand in hand. (うちの国じゃ、同性同士で手つないで歩いてるのよく見かけるよ)」

今度は鞄を肩に掛けた男が言った。

「This kind of chance comes along once in a blue moon, especially in Japan. (そんな機会なんて日本では滅多にないですよ)」

「I see. (わかるよ)」

それから、明後日にこの場所を出て東京に向かうこと、今冬に母国で結婚式を挙げることなど色々な話を聞き、適当に相槌を打っていたらあっという間にバスターミナルについた。

「Thanks for everything. (ありがとう。助かったよ)」

リュックの男が言った。

「You're welcome. (どういたしまして)」

去り際に「Nothing but love can save the world. (愛は

尊いんだよ)」とリュックの男が言って、彼らはバスに乗った。僕はターミナル内のベンチに座り、自分のマンション近くにある青看板が特徴的なコインランドリーの前に停まるバスを待った。

雨が降り始めたようだ。心地よい雨音が耳を包み込んだ。雨音を聞くたびに、僕は幼い頃によく家族三人で行ったキャンプのことを思い出す。誰が雨男、雨女だったのかは判明できていないが、三割以上の高確率でキャンプに行くとその夜に雨が降った。そのたびにお決まりのように父は「まるでイチローだ」と言って、僕らはよく笑いあった。今となっては、くだらない表現だと思うが、その頃の自分にとっては何か心に響いたのかもしれない。今でも時々、父はその表現を使っている。

＊

バスを待っている間、僕はヘッドフォンを装着して音楽鑑賞に浸った。スティーヴィー・ワンダーの歌声が鼓膜に響く。「ユー・アンド・アイ」はなんて素敵な曲なんだろう。そんなことを思っているうちにバスがきた。僕はスーツケースを持ち上げて乗車した。車内の客は多くはなかった。バスの前の方の席に座り、雨に濡れた景色をぼんやりと眺めていた。三駅ほど通過すると、客は多くなっていた。大半がスーツの男で、後ろの方には僕と同じ年代くらい――塾帰りの受験生だろうか――の人たちが四人ほどいた。車内観察をやめて再びバスの進行方向に体を向けた時、肩に振動が伝わってきた。何事かとヘッドフォンを下げて振り向くと、そこには小学生の頃に仲の良かった女の子――薫――がいた。

「久しぶりだね」

薫は愛想笑いをした。

「私のこと覚えてる？」

「そ、そ……そんな。忘れるわけないでしょ」

僕はあまりに急なことだったので呆気に取られていた。

「結構仲良かった女友達、という認識だよ。こっちは」

「そんなこと言ってくれるなんて嬉しい。男子校に慣れちゃって久しぶりに女子と話すの緊張するんじゃない？」

「まあ、そうだね」

僕は正直に答えた。

「ただ会えて嬉しいよ」

「私もだよ」

彼女は――もちろん僕が男子校から脱出したてだったということもあるだろうが――とても可愛らしかった。丸顔で、くっきりとした二重瞼。笑った時にできる靨（えくぼ）。ヘアゴムで結ばれた艶やかな黒髪。少しふっくらとした乳房。そのすべてが素敵だった。僕は自分でも気づかないうちに上気していたに違いない。彼女との他愛ない近況報告をする中で、僕は妙案を思いついた。「薫を好きになってしまえばいいんだ」と。同性に恋愛感情を抱いている僕にとって、それはカンフル注

射以外の何物でもなかった。
「ところでさ、薫って今彼氏いるの？」
　僕は思い切って聞いた。
「いや、いないけど。どうして？」
「だって彼氏のいる女を遊びに誘うのは変だからさ」
　僕は久しぶりに自分の胸が小一の時の初恋のごとくときめいているのを感じた。
「夏休みに遊べないかな？」
「受験勉強で忙しいからなあ」
　彼女は困ったように言った。そうなのだ。彼女は受験生なのだ。それでも、彼女は変わらず優しい人だった。
「お盆の時期に一日くらいなら遊べるかな」
　彼女に遊べそうな日を連絡してもらうことになった。彼女が先に降車した後、僕は再びヘッドフォンを上げた。この夏休みに、僕は同性を愛するという病を治せるだろうか。薫はカンフル剤になってくれるだろうか。そんなことを思いながら僕はバスを降りた。目の前に現れたコインランドリーの看板は今夜も真っ青だった。

＊

　薫と会った日は今年初めての猛暑日だった。日差しを片手で避けながらバスを降りた彼女は、やけに白かった。
「久しぶり」
　彼女が朗らかな声で、僕に言った。
「うん、久しぶり。今日暑くない？」
「うん、暑いね。それで今日は何をする予定なの？」
「何もしなくていいんじゃない？」
　なんとなく初対面の人に話しかけるような心地がした。凍りついた空気を必死に僕らは溶かしていた。取り留めのない会話が宙に舞った後、二人は歩き出した。
　最近流行している恋愛ソングが実はあの曲のコード進行と一緒で、それがパクリなのかオマージュなのかを真剣に友達と話し合っている。そんな話をしたが、彼女がその流行ソングを知らないほど世間に疎いということを知り、そのことを冗談交じりに非難し、笑いあった。その話の流れでカラオケに行くことになった。
　カラオケに入ると、まだエアコンもつけていないはずなのに、肌寒く感じた。テーブルには食べかすがところどころ散っており従業員に憤慨を感じたが、僕は作り笑いをした。
　監視カメラもない薄暗闇の中で、急に気まずくなって、数曲ずつ歌った後はお互いにスマホを触り始めた。
　そうして数十分が経ってから「お手洗いに行ってくる」と言って個室から彼女が消えた。彼女が消えてから僕は後輩の顔を思い浮かべた。思い浮かべては駄目なのだ。これでは、全くもって意味がない。僕は女という生き物を愛さなければいけないのだ。
　部屋に戻ってきた彼女はカバンからスマホを取り出して液

晶画面を見つめた。僕は思い切って部屋の電気を消した。しかし、新着の歌を紹介するテレビ画面だけはどうすることもできず、結局夜の大都会の車道のど真ん中に居るような気分になった。

「なんで消したの？」

僕は何も答えず彼女を抱き寄せた。彼女は最初は抵抗する素振りを見せたが、すぐに受け入れた。僕はまだ幼い乳房を感じながら下半身が窮屈になっていくのを感じた。

「ねえ、固くなってるよ」

彼女は僕に耳打ちした。

「知ってるんだ」

「なにが？」

「その、いわゆる男の生理現象」

「もちろん知ってるよ」

「誰に習うの？　そういうのって」

「同級生の女の子から」

「なんて？」

『男って勃起すると下半身が大きくなるの』って」

「それで？」

『どういうときに勃起するの？』って聞いたわ」

「そしたら？」

『あんたの隣の席の男、いつも勃起してる』って」

「本当だった？」

「うん。すごく立派そうだった」

彼女はいやらしくそう言ってから身体を離した。

「立派なの見せてくれる？」

それから僕はズボンを脱ぎ、彼女は僕のペニスを握った。闇雲に力強く手を動かし、最初は我慢しようと思ったが、痛くなってきたので、「このくらいの力加減がいいんだ」と教えてあげると、彼女は即座にそれを習得し、あっという間に僕を射精に導いた。生まれてから何度目だろうか。また栗の花の匂いだ。彼女の清潔な服に精液が飛んでしまい、居た堪れなくなったが、彼女は心得顔で萎れたペニスに口づけた。僕は彼女が身に纏っていた水玉模様のワンピースとか諸々を脱がせながら、マスター先輩と行った栗の木の話をした。彼女は「私も行ってみたい」と言ったが、今頃はもう栗の花は咲いていないだろう。ブラジャーだけは「男の子には難しいだろうから」とからかわれ、脱がせてくれなかった。

眼前に現れた薫の身体は想像以上に妖艶で、まるで夢の中に居るような気分になった。彼女のヴァギナに手を入れると、冷房から暖房へと切り替わるエアコンのように別人になり、彼女の甲高い歌声が室内に響き渡った。

「子犬みたいでかわいい」

「もっと言って」

「子犬みたいでかわいい」

「その『子犬みたいで』は言わなくていいよ」

「かわいい」

「え？」

「かわいい」
「ああ……だいすき」
女という生き物はなんて単純なんだろうと思った。彼女のヴァギナが濡れていることを確認して、僕はペニスを挿入した。腰を動かさなければいけないことはわかっているが、なぜか動かすことができず、じっとしていることしか出来なかった。そのうち彼女が僕の身体に跨り、腰を動かした。揺れる黒髪と乳房を虚ろに眺めているうちに、彼女のヴァギナの中に勢いよく射精した。
「これ妊娠しない？　大丈夫？」
彼女は心配そうに言った。
「そんな簡単に妊娠しないでしょ」
そう言ってはみたものの、少し怖かった。妊娠だけはさせたくない。
「どのくらい出した？」
「雨上がりの排水溝くらいかな」
「よくわかんないよ」
彼女はそう言って自分のヴァギナに手を入れてその指を舐めた。
「栗の味はしないね」

＊

カラオケを出ると黄昏時だった。しばらく手をつなぎながら歩き、人気のない公園の芝生に腰を下ろした。
「昨日はどこ行ってたの？」
彼女はやおら聞いた。
「母さんの墓参り」
「奇遇ね。私も昨日、母の墓参りに行ったの」
僕の困惑を察して彼女は「私に母がいないこと言ってなかったっけ？」と言った。
「うん」
「言ったつもりだったんだけど」
僕は二の句が継げずにいた。
「私のお母さん、交通事故で死んだの。私が幼稚園の年長さんだった時。お母さん、いつも私を幼稚園まで自転車で送ってくれてね。その日も、いつも通り私をママチャリの後ろに乗せて幼稚園まで送ってくれて。そして『行ってらっしゃい』って笑顔で私に言ったの。私も『行ってきます』って言って手を振り返して。そしてお母さん、何事もなく家に帰るはずだったんだけど。毎度のようにお母さんが見えなくなるまで手を振り続けていたの。そしたら私の後ろを猛スピードでトラックが通り過ぎてね。そしてお母さんを轢いたの。一瞬だった。お母さんの背中が吹き飛んで、私もう立ち竦んじゃって。しばらくしてから園長先生が私を園舎の中に入れて、ずっと背中をさすってくれたの。物心ついてから父から話を聞いてさ。そのトラックの運転手は飲酒運転をしてたって」
「ひどい話だね」

それ以外にかける言葉が見当たらなかった。彼女の頬には大粒の涙が俄雨のごとく伝っていた。思わず「なんかごめん」と謝った。

「いいの。話せば話すほど自分の気持ちが収まるから」

そう言って彼女は涙を拭った。

「あなたのお母さんが亡くなったのは小四の時だっけ？」

「そうだよ」

「私ね、あなたのお母さんが亡くなったっていうのを朝礼で聞かされた時、友達になってあげたい、って心の底から思ったの。ダンス一緒に踊ったの覚えてるでしょ？」

覚えていないわけがなかった。母を病気で亡くし、喪失感に陥っていたなか、体育のダンスの時間にペアを組むことになった。当時流行していたそのダンスは運動会でも披露することになっており、そのペアは必ず異性でなければいけなかった。女友達の少なかった僕がペアづくりの時間に右往左往しているなか、薫に声をかけられたのだ。今まで一度も話したことがなかったが、他に相手を見つけることができそうにもなかったので彼女とペアになったのだ。彼女の意図を知って僕の目頭は熱くなった。

昔の思い出話を一頻り語りきったところで、もう日が暮れ始めたので帰ることになった。

「私の中に、まだ残ってる気がする」

「気のせいだよ」

「次はちゃんとゴムつけてね」

「次？」

「うん。次」

「またするの？」

「したくないなら別にいいけど」

彼女はぶっきらぼうに言った。

「一人でするから」

「いや、したいよ」

ここで「君のカンフル注射が必要だから」なんてことは口が裂けても言うことはできなかったが、それが本心だった。

「次はゴムつけるよ」

僕は約束した。

「ところで薫はヴァージンじゃなかったの？」

「ヴァージン？」

「処女じゃなかったの？　ってこと」

「なんで？」

「だって出血しなかったから」

「絶対に出血するとは限らないのよ」

「そんなもんなの？」

「うん」

彼女は口を尖らせた。

『『男の人は処女にこだわる』って勃起を教えてくれた子が言ってたよ」

僕は失笑した。

＊

夏休みも終盤に近づき、宿題は何一つとして終わっていないのにもかかわらず、僕は薫の家で覚えたてのセックスを繰り返していた。毎日、昼過ぎに彼女の家に向かい、二人で浴槽に入ってから気が済むまでお互いに身体を求めあった。それでも後輩のあどけない顔が頭から離れることはなく、帰宅後に疲れ果てたペニスを握り自慰行為をした。

＊

夏休みを終えて天弓寮に戻り、監獄生活が再開された。薫は夏休みの最終日――最後に身体を交わした日――に「二日に一度は寮に電話するから」と言ってくれたのだが、次第にその回数も減って行った。彼女も受験で忙しいのだ。僕は次第に何度も感じたはずの彼女の体温を忘れはじめ、彼女がどんな声を出して、どんな顔をして、どんな髪をして、どんな脚をして、そしてどんな乳房をつけていたのかを綺麗さっぱり思い出せなくなってしまった。一も二も無く、後輩に自分の想いを伝えられず、また距離を縮める勇気も出なかった。なかなか寝つけない夜が続き、深夜のラジオを聴くことが多くなった。

ある夜に聞いたラジオでは、パーソナリティーの新曲が初オンエアされた。タイトルは聞き取れなかったが、とてもポップであり尚且つ近未来を漂わせるサウンドだった。パーソナリティーの解説に思わず涙ぐんだ。その歌詞は、異性愛に限らないあらゆる恋―もちろん同性愛を含む―を肯定したものだったから。

＊

マスター先輩が教室のベランダから飛び降りた。

その日は秋雨がしとしと降る陰々とした一日だった。三限目が終わり、僕は後輩のいる教室を通り――その教室はまだ授業中で、今にも眠ってしまいそうな後輩の顔を確認できた――廊下を一人で歩いていた。すると急に校内放送が入り、あの白髪の教頭の声が響いた。

「生徒諸君、今すぐ自分の教室に戻りなさい」

三度しわがれた声で、それは繰り返された。教室に戻り席に着くと、担任教師が小走りで教室に入り、教卓の前に立って、マスター先輩が教室のベランダから転落したことを告げた。多くの者が言葉を失っていた。僕はその現実をすぐには受け止められなかった。最後にマスター先輩と会ったのはいつだ？　そうだ。あの新幹線の時だ。あの日、先輩は自殺を匂わせるようなことを言っていたか？　いや、言ってないはずだ。それどころか先輩はあの時、僕にこう言ったのだ。

「でも、お前決して死ぬんじゃねえぞ」

まさかマスター先輩が自殺するなんて。僕にとってその事

実はすっと喉をとおりにくいものだった。緊急の全校集会が体育館で開かれ、教頭が「原因は今から究明して行く」とか「今後、二度とこのようなことが起こらないようにしたい」とか「事故現場の高校校舎の中庭には近づかないように」とか「誠に遺憾だ」とか、そういったことを何度も繰り返し生徒たちに訴えかけていた。

翌日、マスター先輩が自殺したのは同級生がカミングアウトしたからだと風の便りに聞いた。カミングアウトしただろうと思われているその四人は学校にきていない、ということなので、その噂は確かなものだろう。

心の中で、彼らを気の毒だと思った。彼らからしてみれば、「あいつ、お前のこと好きなんだぜ」と吹きかけた。ただ、それだけのことなのだ。しかし、それが結果的にマスター先輩を死に向かわせたのだ。僕だったらどうだろう。僕の秘密を知る誰かが後輩に自分の好意を伝えたら。僕も自殺してしまうかもしれない。だが、どうしても彼らを悪者にはできなかった。マスター先輩を殺したのは誰だ？

そんなことを考えながら数日が経ち、ある放課後に僕は人目を盗んで高校校舎の中庭に入った。ブルーシートをそっと上げると、そこには真っ赤な、本当に真っ赤な血痕が残っていた。

＊

マスター先輩がいなくなってから、僕も先輩と同じ道を辿って行くような気がした。僕も最後には同性愛に目覚めた報いとして死ぬのだろうか。精神を悲しみや憎しみが蝕み、その憑き物を落とそうにも落とせない日々が続いた。

ある日、部屋を掃除していると「ペット・サウンズ」が出てきた。先輩に返しそびれていたそれをどうしようかと悩んだ挙句、あの栗の木が立つ公園に埋葬することにした。

翌朝、一人で昼過ぎに鄙びた駅に向かった。レコード喫茶で昼食を取ろうと思っていたが、そこは駐車場に姿を変えていた。世界中の音楽がすべて止まったような気がした。

真新しい保育園の向かいに思い出の公園はあった。砂場に転がっていた青いシャベルを握り、大きな栗の木――それはもう既に落果を終えていた――の下で僕はしゃがんだ。シャベルで穴を掘って「ペット・サウンズ」を埋めた。埋め終わってからそのまま蹲った。

「お兄ちゃん、なんで泣いてるの？」

後ろを振り返ると園児がいた。奥に佇むその子の母親と思しき人がこちらを見ていた。僕は沈黙した。

「そ……そのシャベル、ボクのなんだ」

「これ？」

「うん」

「ごめん、返すね」

「あげる」

「え？」

「そのシャベルあげる」
「いや、でもこれは君のなんだろ？」
「それボクのじゃなかった」
そう言うと目に涙を湛えた園児は急ぎ足で母親のもとへ駆け寄った。母親は彼の頭を撫でて何かを言った。そして親子は手をつなぎ公園をあとにした。
世界がどんなに腐っても彼は幸せでありますようにと切実に願った。そして僕も彼を追うようにして公園を出た。
数日後にあった十月の定期検診で、医者はいつも「良好です」とその日のうちに伝えてくれるのに、その日に限っては「明日、親御さんと一緒にきてください。そこで検査結果を伝えます」と言った。

＊

翌日、父は会社を休み天弓中学校にきた。終礼が終わり、職員室に向かうと父がいた。
「ちょっと痩せたな」
僕は無言で頷いた。
二人で病院に行き、医者から僕の余命が残り三か月もないことを宣告された。余命宣告、だなんてドラマみたいで自分の置かれた状況に呆れてしまった。父は僕の背中をさすり、その温もりに思わず泣きそうになった。病院の待合室に座っている間、父は頻りに僕の生い立ちを語ってくれた。どのエピソードにも両親の愛が溢れていて、僕はどんなに幸せな人生を送ってきたんだろう、と久しぶりに思った。
病院を出てから老舗のラーメン屋に向かった。まだ六時過ぎだったので、客は僕らしかいなかった。豚骨ラーメンを二杯注文して出来上がりを待つ間、「一緒に家に戻らないか？」と父に言われた。僕はそれが最期の親孝行になることはわかってはいたけれど、後輩を諦めきれなかったので「ごめん、最期まで普通の学生でいたいんだ」と思いつきの嘘で断った。
無造作に置かれた店内のラジオは今夜のプロ野球の途中経過を速報し終え、明日の天気を予報していた。明日の天気は全国的に曇りで、降水確率は三十パーセントとのことだった。麺を啜りながら父は僕に言った。
「まるでイチローだ」

＊

それから一週間後、薫から天弓寮に電話が掛かってきた。
「久しぶりだね」
「そうだね」
「ごめんね、全然電話掛けれなくて」
「いいよ、別に」
「もう私のこと好きじゃなくなった？」
「そんな訳ないじゃん。受験勉強で忙しいんでしょ？」
「相変わらず優しいね」

「こっちは元気でやってるけど、そっちは？」
「うん、私も元気だよ」
僕は自分の余命が残り僅かであることを彼女に告白しようかと思ったが、タイミングが掴めなかった。
「じゃあね。私またこれから勉強頑張るから」
「頑張れよ」
「そっちもね」
「うん、ありがとう」
「あのさ、最後にお願いがあって」
「何でも聞くよ」
「何でも？」
「うん」
「あのね」
「うん」
「私に好きって言って」
「そんだけ？」
「いいから」
「好き」
「もうちょっと丁寧に」
「好き」
「私も」
彼女はそう言って何の前触れもなく電話を切った。僕はチェット・ベイカーの「枯葉」を聞きながらその夜を明かした。

＊

翌朝、僕はいつも通り六時三十分に起床して、用を足して、洗顔をして、食堂で朝食を食べながら寝起きの後輩を見て、歯を磨いて、制服に着替えて、登校した。本当にいつも通りの何気ない一日だった。
夜九時過ぎに寮教諭が「速達だ」と言って部屋に入ってきた。薫の手紙にはモノクロの便箋と妊娠検査薬が入っていた。便箋には「私は自殺します」と一言そう書かれていた。そして、妊娠検査の結果は陽性だった。
頬に滴る涙は、僕の罪悪感を洗い流してはくれなかった。むしろ、それは馬鹿げた罪悪感を上塗りした。喪失に浸された数分間、僕は昨夜の電話のことを思い出していた。彼女が最後に言った言葉は、どうしようもなく美しくて、でも僕の左心室には決して届きはしなかったのだ。その無力感は、自慰の後に僕を襲うそれとは似て非なるものだった。僕は彼女を完全には愛していなかった。彼女はただの一時的なカンフル剤に過ぎなかった。せめて彼女に懺悔したかった。あの世で再会できたら、彼女は駄目な僕を許してくれるだろうか。
便箋と妊娠検査薬を封筒に戻そうとした時、僕は便箋の裏に殴り書きされた一文を見つけた。
「あなたの『好き』は偽物」

＊

僕は深夜二時過ぎに部屋を出た。二階から四階へ階段を上って行く。間違いなく、そんなことをしたら明日からしばらくは寮にいられなくなる。でも、もう戻ることができなかった。一歩一歩、ゆっくりと手すりを掴み、足を前に進め、三階から四階へ上って行く途中で、僕はスリッパを履き忘れて裸足でいることに気づいた。

いつも部屋の前を通るだけで決して中には入らなかった後輩の部屋の前に辿り着いた。寮内では個室の鍵を掛けてはいけないことになっているので、当然この後輩の部屋にも鍵は掛かっていないはずだ。冷えたドアノブに手を伸ばしドアを押した。

そこには確かに後輩がいた。彼の傍らにあるデジタル時計は午前二時十六分を告げていた。ゆっくりと彼に近づき、そうして脚を曲げる。彼の寝顔は何とも言えないほど平和だった。ずっと見つめていたら憎悪が喉を通りかかろうとする吐瀉物のように込み上げてきた。僕は彼の身体に乗って首を絞めた。「全部、お前が悪いんだ」と思うと力が籠もった。

あっさりと死んだ後輩の唇に僕は口づけした。口元に残ったクールミントの味がドラッグみたいに全身に駆け巡り、平和な死に顔を前に勃起した。彼の服をすべて脱がした。冷えた死体を手でゆっくりとなぞりながら、貪るように愛撫した。

そして、栗の花の匂いを幾度も僕は嗅いだ。